2023 年9月24日 久宝教会 礼拝メッセージ

「友だちをつくる」　　牛田匡牧師

聖書　ルカによる福音書 16 章 1－13節

今回の聖書のお話は、不思議なお話でした。新共同訳聖書や聖書協会共同訳聖書には、「不正な管理人のたとえ」という小見出しが付けられていますが、主人の財産の管理人が、そのお金をちょろまかし、帳簿や証文を書き換えて、不正を働いたとあります。それにもかかわらず、彼はその責任を追及されるどころか、それが「賢い」と言って褒められた、というのですから、何とも理解しがたいお話です。どうやら、このお話を理解するためには今から約 2000 年前に、歴史の中を生きられたイエス様が、誰に向かってこのたとえ話をされたのか、このたとえ話を聞いた人々の置かれていた生活の状況や、時代背景などを知っておく必要がありそうです。

人口の 9 割以上、大多数の人々が、農民や漁民であり、被支配者の下層・最下層の貧しくされた人々でした。一方でこのたとえ話に登場する「ある金持ち」とは、極々少数であった支配者階級の人であり、聞き手であった人々を支配し、搾取している大地主、農園の経営者のことでした。各地の農地、農民たちが持っていた先祖伝来の畑を、借金のかたとして没収して自分の所有地にして、大規模な農園として造り変え、そこに数人の管理人を置いて、小作人や奴隷たちをそこで働かせるという経営モデルです。地主は各地に農園を持っていましたから、一ヶ所に常駐していたのではなく、それらを巡回していました。そのため普段は不在で、農園の現場は、現地の管理人たちに任せていました。当時のガリラヤ地方にはそのような農園がいくつもあったようですし、イエス様の話を聞いた人々も、そのような農園で働かされていたり、またその様子を身近で見聞きしていたりしたのだろうと思います。有名な「タラントンのたとえ」や「ぶどう園の労働者のたとえ」なども、そのような当時の社会状況を背景としたたとえ話だと理解されています。

そして、このお話に出て来る「管理人」とは、そのような地主・経営者の財産の管理を任されている僕（しもべ）でした。恐らく、この僕も自由な身分の者ではなく、

主人の支配下から逃れることのできない奴隷だったのではないかと思われます。農園の経営者である主人は、常にいるわけではありませんし、小作人や使用人たちと直接金品のやり取りをするわけではありません。いつでも現場に行き、直接の監督や交渉をして、時に小作人や使用人たちに主人の意向として無理難題を押し付け、要求を飲ませるのは、中間管理職である彼ら管理人たちでした。そのため、当然、現場の労働者たちからの反発の矢面に立たされていたのも、彼ら管理人たちでした。当時のローマ帝国の植民地支配下における「徴税人」の立場もまた同じ様なものでした。

そのために彼ら管理人たちは、上からも下からも圧力をかけられていて、なかなかしんどい状況に置かれていたと考えられます。当時の主人がどれだけ冷酷だったかは、例えば 6 節や 7 節にあるとおり、主人にいくら「借り」があるか、というその内容を見れば分かります。「油 100 バトス」とは、およそ 150 本のオリーブの木から採取できるオリーブ油のことで、お金にすると大体 1000 日分の日当、約 3 年分の年収に相当すると言われています。また「小麦 100 コロス」とは、約 42 ヘクタールもの広大な畑から収穫される収穫量であり、お金に換算すると、およそ 2500 日分の日当に相当する額なのだそうです。それら膨大な量の「借り」から考えられることは、それらは小作人たちの家族や親族が実際に食べるために借りたものではなくて、毎年の小作料、年貢として主人に納めるべき油や小麦が、ある年に天候不順や様々な理由から不作となり、納めきれなかった。それが主人に対する「借り」とされ、利子ばかりが雪だるま式に増えていつの間にか、膨大な量になったのだろうということです。

さて、そのような厳しい主人の下にいた管理人が行った「不正」とは、何だったでしょうか。それは主人の帳簿や証文を書き換えるということでした。しかし、そもそもこの主人が持っていた莫大な富や財産それ自体が、多くの人々から奪い取ったことよって成っている不正にまみれた財産に他なりませんでした。1 節には「管理人が主人の財産を無駄遣いしている、と告げ口する者があった」と書かれています。この書き方だと、管理人が自分の私腹を肥やすために、主人のお金を着服したよ

うに読めてしまいますが、むしろ普段から搾取され貧しくされていた小作人たちに、主人の金を無断で配って回り、ばら撒いていたのが実態だったのではないかと思われます。主人に取り入ろうとしたのか、その管理人に反感を持っていたのかは分かりませんが、そのことを「不正」として告げ口する者がありました。そしてこの管理人は、その職を解任され、失業の危機に直面します。そこでこの管理人は自分を助けてくれる仲間、友だちを作るために、主人に借りのある者を一人ずつ呼んで、帳簿と証文の書き換えを行いました。

主人にしてみると、そのようなことをされては堪りません。しかし、すぐにその管理人を処罰して、小作人たちに「その証文は無効だ」と伝えたとしても、小作人たちからの反感を買うだけです。これからも引き続き一揆などを起こされずに、農園経営を継続していくためにも、ここは短期的な損失には目をつむり、むしろ「借りを減らしたことを黙認してくれた寛大なご主人様」と称賛される方が、長期的には得をするという計算が、主人の頭の中では出来たのだと思います。それ故に主人は、管理人の有能さを認め、「抜け目のないやり方」を褒めたのでしょう。

このたとえ話を読む時、私たちは本当に「不正」を働いているのは一体誰なのか、ということに改めて目を向ける必要があります。膨大な富、それ自体が多くの人々を搾取すること無しには存在し得ない不正にまみれたものです。ですから、9 節にある「不正の富で友だちを作りなさい」は、たとえ不正にまみれた富であっても、今自分が利用できるものを最大限利用して、いざと言うときに助けてくれる友を作りなさい、という言葉として理解することが出来ます。「金の切れ目が縁の切れ目」という言葉がありますが、管理人自身もその役職を解かれ、放り出されたら一人では生きていくことの出来ないような小さくされた存在でした。その時に、主人の側か、小作人たちの側か、どちらに目を向け、どちらの友になろうとしたか。そこにこそ彼の賢さ、見極める感性があったのではないかと思います。

先週、岸田首相の下、2 回目の内閣改造がありました。下がり続けている内閣支持率を引き揚げる目的だったのでしょうが、何も変わり映えしないいわゆる「お友だち人事」に驚かされました。岸田首相の目の中には、国民の姿はなく、ただ与党

内の各派閥の力関係だけが映っているということが、如実に表れていました。更に内閣閣僚には女性が 5 人増えたと言っても皆、世襲議員である一方、54 人の副大臣と政務官からは、初めて女性議員が不在となりました。口では「女性活躍社会」と言いながら、真反対に逆行する現実に呆れてしまいます。政治家のための政治、金持ちや権力者、いわゆる上級国民のための政治の果てに、この社会はどこに向かっていくのでしょうか。また「お友だち人事」と揶揄されるその「友だち」は、本当の「友だち」なのかと訝しんでしまいます。

今回の聖書の言葉には、「二人の主人に仕えることは出来ない」（13）という言葉もありました。金も権力も地位も失った時に、それらに関係なく「ただの友だち」として、関わり続け、支えて助けてくれる存在を、私たちはどれだけ持っているでしょうか。持っている人は持っているものを失うまいと、ますます握りしめて、周りに心と目が向かない傾向がありますが、持っていない人はむしろ自由な感性で、周りの持っていない人に対して、友だちとしての軽やかな心遣いが出来ているような気もしています。この世でどれだけ富を得ても、あの世に持って行けるわけではありませんし、この世でも本当の幸せや満足感は、お金だけでは得られないものなのではないかと思いますが、如何でしょうか。

「友だちをつくる」……。共に生きる仲間、支え助けてくれる仲間と出会うこと……。富やお金はそれ自体に価値があるのではなく、そのために用いる道具に過ぎないのだと思います。他にも今、自分が持っている能力も立場も、全ては神様からの預かり物。それを誰のため、何のために用いて、役立てていくか、友だちを作るため、またその友のために用いて行けるか。私たちは、自分自身のことだけではなく、自分の隣りや周りにいる方々と共に歩むように、今週も導かれて行きます。